

## サクラやウメ枯らす 外来カミキリ

サクラやウメなどを枯らせる特定外来生物「クビアカツヤカミキリ（クビアカ）」の生息域が京都府近辺で広がっている。そんな中、生息地に近い山城地域への侵入を防ごうと、府が対策に乗り出した。「防衛ラインのひとつ」と位置づける八幡市では職員向けの講習会を初めて開催した。観光や農業への被害が予想されることから、定着を食い止めたい考えだ。（長谷川祐太）



クビアカツヤカミキリの標本。体色が黒く、胸部が赤いのが特徴

クビアカは朝鮮半島や中

国などが原産で、成虫は体長約2〜4センチ。体色は光沢のある黒色で、赤色の胸部が特徴。サクラやウメなどのバラ科の樹木に1匹あたり約300〜千個の卵を産み付ける。幼虫は樹木内を食い荒らし、次第に枯死する。被害木の幹からはふんと木くずが混じった「フラス」が大量に発生する。国内では2012年に愛知県で生息が確認され、現在までに大阪府や奈良県など13都府県に増えた。クビアカが定着した公園や果樹園では、サクラやモモなどが枯死し、伐採せざるを得なくなった例もある。今年までに、京都府に接する大阪府枚方市や高槻市でも発見されている。

# 山城への侵入防げ

## 「八幡は防衛ライン」府、対策乗り出す

京都府内では確認されていないが、府自然環境保全課の担当者は「京都にいつ入ってきてもおかしくない状況」と話す。中でも警戒しているのが山城地域だ。八幡市には桜並木が1キロ以上続く淀川河川公園背割堤地区、城陽市には府内でも有数のウメの生産地である青谷地区がある。同課はいずれの場所も「クビアカにとって格好のすみかになりうる」とみている。

府は11月下旬、背割堤近くのさくらであい館（八幡市八幡）で自治体職員向けの講座を開いた。八幡市や宇治市のほか、府や国交省淀川河川事務所などの担当者らが参加し、専門家から生態や他地域での事例を学んだり、背割堤のサクラを使って防除対策を実践したりした。

府は今後、府民への周知を進め、講習会も開く予定。「一度定着してしまうと根絶は難しい。京都の観光や農業に大きな被害が出る恐れがあり、なんとか未然に食い止めたい」とする。クビアカを見かけた市民には、自然環境保全課075（414）4706への連絡を呼びかけている。